

価値自由の意味と可能性

著者	宇都宮 京子
著者別名	Kyoko UTSUNOMIYA
雑誌名	東洋大学社会学部紀要
巻	58
号	1
ページ	5-19
発行年	2020-11
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00012238/



価値自由の意味と可能性

Max Weber and Value-Freedom

宇都宮 京子

Kyoko UTSUNOMIYA

1. 「ドイツ社会学会」の設立と価値自由

米沢和彦の『ドイツ社会学史研究』（1991年）には、マックス・ヴェーバーにも関係があるドイツ社会学会の設立時の状況が詳しく書かれている。まず、本書に沿って、「ドイツ社会学会」の設立と価値自由との関係について見ていきたいと思う。

テンニエスやジンメルなど個人的には卓越した社会学者が存在しながらも全国的な学会組織の形成が遅れていたドイツにおいて、1909年になってようやく「ドイツ社会学会」（Deutsche Gesellschaft für Soziologie）が設立された。マックス・ヴェーバーは、学会設立の当初の段階では、積極的な役割を果たしていなかったが、3月7日の設立総会の時に初めて表舞台に登場した。その彼にとって、「社会政策学会」における「価値自由」の論敵ゴルトシャイト¹⁾が積極的な役割を果たしている「社会学会」が、今後どのような性格のものになるかは重要な問題であった。（米沢、1991：16）

1909年1月3日 「設立準備会」（die konstituierende Sitzung）がベルリンで開催され、その後、1909年1月30日 理事会が開催され、投票により、マックス・ヴェーバーが委員長になった。1909年6月にヴェーバーは、『勧誘状』（Werbungsschreiben）を関係者に送付し、学会への参加を広く呼びかけていたが、その際、学会の基本原則と研究対象を明確にうちだしている。

また、1910年に開催された第1回大会において、ヴェーバーは、運営委員として学会の「事務報告」を行ったが、それは、学会の事務処理連絡というのではなく、「今後の学会の『基本的立場』と『研究課題』、一言にしていえば『学会の進むべき道』を指し示した格調高い『学術講演』であった」（米沢、1991：32）。彼は、「当学会は」「学会内部における実践的な理念の宣伝は、いかなるものであれ、原則的かつ決定的にこれを拒否します」とそのなかで述べている。（米沢、1991：34）

さらに「ドイツ社会学会」の定款の作成のさいの最大の論点は、「価値判断排除」の原則を盛り込むかどうかだったが、「価値自由」の原則は「社会意味と学会」の定款第一条に盛り込まれることになった。（米沢、1991：23）

その定款第一条のなかには、以下のような文言が記されている。「会はあらゆる科学的傾向と社会

学の方法とに対し、等しくその場を提供するが、なんらかの実践的（倫理的、宗教的、美的）目的を代弁するものはこれを拒絶する」（米沢、1991：24）。

この「なんらかの実践的（倫理的、宗教的、美的）目的を代弁する」とは、どういう意味であろうか。それは、「あらゆる科学的傾向と社会学の方法」とは相入れないものとして述べられているが、その実践的目的と科学的傾向との関係に関する問題は、1904年に『社会科学・社会政策雑誌』（『アルヒーフ』）第19巻に発表された「社会科学と社会政策の認識の『客観性』」（以下、「客観性」論文と略記する）においても取り上げられている。

2. 「客観性」論文における科学と政策との関係について

1904年に発表された「客観性」論文では、「文化意義」という概念が用いられ、リッケルトの認識論との関連性が強く見られる。また、1906年に発表された「文化科学的論理学の領域に対する批判的研究」（以下、「文化科学」論文と略す）においても、「価値分析は因果的遡源の糸口をつくりだし、この遡源を行なっていく途上で決定的な“観点”となるものをその追及に与えるのであった」（Weber, 1906：S.251=154）と述べつつ、この見解が、リッケルトの立場に通じるものであることも示唆している（同上書：S.251-252=155）。

また、「客観性」論文の中で、ヴェーバーは、以下のように述べている。「すなわち、社会科学の領域においては、科学上の問題が提起され展開される最初のきっかけは、経験上、実践的な「問題」によって与えられるのが普通であり、そのため、すでに、ある科学的問題の存在を認めること自体からして、ある特定の報告に向けられた、行ける人間の意欲と個人的に結びついている、という事情である」（Weber, 1904=1998：50）。「われわれはこれまで、『価値判断』と『経験的知識』とを原理上区別するさい、つぎのことを前提としてきた。すなわち、社会科学の領域には無条件に妥当する種類の認識、つまり経験的实在の思考による秩序づけが、じじつ存在しているという前提である。この前提が、いまや問題となり、われわれが追及している真理の客観的『妥当』とは、われわれの領域ではなを意味しうるか、について論じなければならない。」（同上書：54）

社会政策などを対象とし、人々の実践的な目的（関心）と切り離せない対象領域を研究対象とする「社会科学」は、「価値判断」と「経験的知識」との区別や関係について検討しつつ、その科学性や客観性を論じることの必要性がここで述べられている。

ところでヴェーバーは、同論文のなかで以下のようにも述べている。「研究者の価値理念がなければ、素材選択の原理も、個性的实在の有意味な認識もないであろう。また、なんらかの文化内容の意義にたいする研究者の信仰がなければ、個性的实在を認識しようとするいかなる研究も端的に無意味であるのと同様、かれの個人的信仰の方向、かれの魂に映ずる価値の色彩の分光が、かれの研究に方向を指示するであろう。……そういうわけで、われわれの意味における文化科学的認識は、实在の構成部分のうち、われわれが文化意義を付与する事象と—いかに間接にであれ—なんらかの関係をもつ

部分だけを取り上げるかぎり、『主観的な』前提と結びつけられている。それにもかかわらず、文化科学的認識は、質的な性格をそなえ、個性的で重要な自然事象の認識とまったく同じ意味で、純然たる因果認識であることにもとより変わりはない。(同上書：95-96)

この主観的な前提と結び付けて世界を「意義深い」と思うこと、もしくは、「重要である」と思うことであると考えると、そのような観点に基づいて取り出された文化意義を付与された事象の断片に基づく認識内容と、自然事象の認識内容とが、同様に因果認識としてみなされ得るのかどうかは問われねばならないと思われる。この点については、後ほど検討するが、「客観性」論文においては、この問題は、「理念型」の形成によって答えを与えられている。

しかしリッケルトは、この点を彼の哲学において解決しようと努力をし、その点をラスクが批判していたことは、筆者は以前に別稿で指摘をしたがここで確認をしておきたい。

3. カント、リッケルト、フッサール、ラスクにおける価値概念の位置づけ

3-1. リッケルトの価値をめぐる見地について²⁾

リッケルトは、文化客体と自然との関係について、以下のように述べている。「文化は、価値を認められたもろもろの目的に従って行動する人間によって直接に生産されたもの、或いは（もしそれがすでに存在しているならば）少なくともそれに附著せる価値のゆえにわざわざ養護されたものとして、自然に対立する。……文化客体にはかようにいつも価値が附著している。……科学は自然客体を財としてではなく、価値との関係を離れたものとして考えるが、もし頭の中で文化客体からあらゆる価値を剥がしてしまえば、文化客体も単なる自然となる」。(Rickert, 1926=1939：48-49)

また、価値関係の手續と価値評価との関係については、以下のように述べている。「価値は何ら現実物ではない、物理的のそれでも、心理的のそれでもない。その本質はその妥当性にあるのであって、実在的事実性にあるのではない。価値は……第一に、ある客体に『附著』しているので、そのためにその客体を財たらしめることができる。第二に、価値は或る主観の働きに結合されているから、そのために此の働きは評価となることができる。ところが財と評価については、ひとは先ずそれらに結びついている価値の妥当性を問い、しかる後に財が果たして本当に財の名に値するかどうか、或いは評価が正当に行われるかどうかを突き止めようとすると考えられる。我々が実践的態度を以て対象に臨もうとするときはそうするのである」。(同上書：149)「我々の問題にしている価値関係の手續はそれ故に、もしそれが理論的科学としての歴史の本質を言い表わすものなら、極めて厳密に評価の手續と区別されなければならぬ」。「……実践的に評価することと理論的に価値に関係づけることとは、相互にその論理的本質を原理上異にした二つの働きである……」。(同上書：150)「価値ありと事実認められた諸価値の実現、またはかかる価値の附著せる諸財の発生にとっては、現実的なものの総体に於ける諸客体の或る一定の選択ということのみが重要であるということ、そしてこれらの客体の何れに於いても、又もや、その内容の或る一定の部分……のみが問題になるということ、是である」。(同

上書：151)

リッケルトはこのように、実践的に評価すること理論的に価値を論じる場合とを区別していたことがわかる。

しかし、『認識の対象』(第2版)(Rickert, 1904=1916)においては、この区別をめぐる見解を覆すかに見える論述を展開している。「総じて認識とは判断を以て始まり、判断を以て開展し、ただ判断の中にのみ成立する事ができる。之を以て見ても認識するという事は単なる表象のみを包含せず、その論理的意味には肯定或は否定的要素の欠くべからざる過程であるという事がわかる。なんとすれば肯定或は否定作用を待って始めて表象から何等かの真なるもの又は偽なるものが生じ、従って認識が成立するからである」。(Rickert, 1904=1916: 150)「—認識するということはその論理的本質から言うと、肯定或は否定する事である。換言すれば理論的主観は肯定または否定する主観として考えられねばならない」。(同上書：151)「完全に開展せられたる判断にも、しかも其の論理的意味にとって本質的要素として一種の『実践的』態度が存在する」。(同上書：154)「総じて認識は、完全なる判断の中に存在し、従って判断に妥当なるものは、認識にも亦然るべき筈であるから、判断と意志及び感情作用との密接なる関係から、純然たる理論的認識の場合にも常に何等かの価値に対してとるべき態度が問題となる」と言うことができる」。(同上書：155)これらのリッケルトの論述は、判断と主観と価値との関係に混乱が見られる。しかし、価値対立を判断する基準が判断の土壌と同じところにある限り、この混乱は当然生じる可能性があると思われる。つまり、何かを肯定したり否定したりする価値判断と、何か論理的に知るに値すると思う価値判断とは重なり得るのではないだろうか。

このようなリッケルトの立場について、その弟子であるラスクは、1908年に「論理学に実践的理性の優位はあるだろうか」というタイトルの講演で批判を行った。この講演の中でラスクは、「主観的意味についての教説は、論理学と同様に『認識』も、何としても倫理学の支配下には位置付けることはない」(Lask, 1908: S.356)と述べて、リッケルトの見解を批判した。その後、リッケルトは、ラスクのこの批判を受けて、「認識の二途」という論文を発表するが、この論文は、ラスクの見解を踏まえたものであったため、実はラスクが自分より先に公開しないように懇願していたという経緯があったことなどを、当時のリッケルトやラスクやヴェーバーの書簡から知ることができる³⁾。

ラスクは、その後、1911年に『哲学の論理学とカテゴリー論』、1912年に『判断論』という2つの書籍を出版するが、それらの両著作の中で、ヴァインデルバントやリッケルトにも敬意を払いつつ論及しているが、また、自分の意味をめぐる考えがフッサールの見解から影響を受けていると述べている。また、フッサールに宛てた書簡の中でもそのことに触れつつ、自分の見解とフッサールの見解の異なる点も指摘していた。ラスクはこのように、新カント学派の流れを汲みつつ、現象学者であるフッサールの見解も取り入れて、独特の意味と価値との関係についての見地を展開した。

ところで、ラスクによるリッケルト批判の論点であるが、ある主観が、ある出来事を「重要である」と「判断」するとき、そこに見いだされる「価値」とは、実践的価値なのか、認識的価値なのかという区切りを付けることは可能なのだろうか。原点に戻って考えると、そもそも「価値」とは何な

のであろうか。また、主観的な「判断」との関係はどのようになっているのであろうか。その点を以下で検討したいと思う。

3-2. カント、フッサール、ラスクにおける価値概念の位置づけ⁴⁾

3-2-1 カントにおける価値

カントにおいては、認識と価値とは、純粋理性と実践理性とを区別するなかで切り離されていた。カントの有名な3冊の批判書、『純粋理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』の翻訳書の事項索引において、「価値」という語が取り上げられているのは、『判断力批判』のみである（Kant 1914 [1790]=1964（下）：事項索引12）。その記載内容を見てみたい。①「人間の存在の価値は、彼が道徳的原理に従って営む行為にある。411-412」。②「自由な心的状態において為すところの行為が、人格としての人間の存在に絶対的価値を与えるのである。13」。③「人間の行為の内的、道徳的価値と外的価値との区別。461A」。④「人生の価値は、人間が合目的に営むところの行状にある。395A」。⑤「人間の人格的価値は、人間とその存在とが究極目的たり得るための条件である。471」。⑥「世界考察といえども、世界の究極目的に関係することによってのみ初めて価値をもつのである。411」。⑦「創造の絶対的価値は幸福ではない。411」。⑧「人間の存在は善意志によってのみ絶対的価値をもつ。412」。⑨「感覚の価値。164」。

これらの個所での「価値」の使われ方を見ると、人間の存在価値や人格的価値に関する文脈の場合が多いが、⑥「世界考察といえども、世界の究極目的に関係することによってのみ初めて価値をもつのである」だけは、「世界考察」が価値をもつ場合について論じている。

この前後の文脈を見ると以下のように書いてある。「とはいえ世界における自余いっさいの被造物がそれぞれの価値をもつのは、これらの被造物が人間の認識能力（理論的理性）に関係するからではない、人間は単に世界を考察し得るものとして存在するわけではない。もしこういう世界考察が、究極目的をもたない物しか人間に示さないとしたら、世界が認識されたところで世界の存在に価値が生じる筈はないからである。むしろこうした世界考察そのものすら、世界の究極目的に関係することによってのみ初めて価値をもつのである、それだからそのためには、かかる究極目的がすでに前提されていなければならない」。（Kant, 1914 [1790]=1964：S.410-411=（下）155）「…自己の存在の価値を自分自身に与え得るものは人間だけである、そしてこの価値の本原は彼が行為するところのものにある、即ち彼がいかに行為するか、またいかなる原理に従って行為するかというところにある、しかしその場合に人間は、自然の単なる一環としてではなく、彼の欲求能力の自由において行動するのである。換言すれば、ここにいうところの欲求能力の自由とは善意志にほかならない、人間の存在はこの善意志によってのみ絶対的価値をもち、また世界の存在は人間のかかる存在に関係して初めて究極目的をもち得るのである」（同上書：S.411-412=（下）156）。

カントの見解では、善意志や究極目的との関係を抜きにして価値について語ることはできないことがここでは確認できた。

3-2-2 フッサールと価値概念

フッサールにおいては、初期の『論理学研究』においては、意味の問題が中心的に論じられており、その志向性の概念は、価値視点とは別物であると考えらるべきだと思われる。

「通説によれば、規範学の諸法則は、…〈あるべきもの was sein soll〉を述べるのであり、それに対して理論学の諸法則は端的に〈現にあるもの was ist〉を述べるのである」。(Husserl、1928 [1900]=1968:59)「軍人は勇敢であるべし」とはむしろ勇敢な軍人のみが「善い」軍人であるという意味であり、しかもこれには…勇敢でない軍人は「悪い」軍人であるということが含蓄されているのである。「…このようにこれらすべての場合に、われわれはわれわれの積極的価値評価、積極的価値述語の承認を、充たされるべき条件に依存して行っているものであり、その条件が充たされない場合はそれに対応する否定的述語が付与されるのである。…「善い」という言葉は勿論ここではなんらかの価値があるものという極めて広い意味で使われているのであり、われわれが例示した形式に属する具体的な諸命題では、その都度それらの根底にある価値評定 (Werthaltungen) の特殊な意味合いで、たとえば有益なもの、美しいもの、道徳的なものなどと解されるのである」(同上書:60)。

「これら諸規範の全体は明らかに〈根本的価値評定によって規定され、それ自身で完結した一群〉を成している」。(同上書:64)「…どの規範学もそれゆえなおのこと (a Fortiori) どの実用学も一ないし若干の理論学を土台として前提しているのである。すなわち〈規範学や実用学は一切の規範化から切り離すことのできる理論的内実を所有していなければならず…〉」(同上書:66)「こうしてたとえば『AはBであるべし』という形式の各規範的命題は『BであるAのみがCという性質を有する』という理論的命題を包含しているのである。なおこの場合われわれはCによって「善い」という基準的述語の構成内容(たとえば快楽、認識など、与えられた領域における根本的価値評定によってまさに善しとして賞揚されるもの)を暗示しているのである」。(同上書:67)

この箇所から判断する限り、フッサールにとっての「価値」とは、「価値評定」と切り離されない文脈で用いられており、「善い」という価値が理論的命題のなかで理論的内実とともに表現されることになっている。つまり、価値は価値、理論的なものは理論的なものとして区別されたうえで、両者の接合が考えられている。

3-2-3 ラスクにおける意味と価値

ラスクは、リッケルトやヴァインデルバントの影響を受けつつも、フッサールに歩み寄っている。ラスクにおいては、価値の問題と意味の問題がどちらも捨てられることなく、判断との関係も含めて正面から論じられている。そうであるならば、そのラスクの意味と価値をめぐる議論を検討し、リッケルトやフッサールの見解との関係を探ることは、意味概念も価値概念も捨てることなくその両方を自分の方法論に取り入れていたヴェーバーの見地を探るのに役立つのではないと思われる。

3-2-4 「判断論」について

その序言に於いて、本論文は、「先験論理学に対する判断論の関係を明らかにするよう努めている」などして、前年に発表された「哲学の論理学とカテゴリー論」に足場を与えるものと述べられている。また、「この論文はその際、価値対立の概念、従って一般的哲学的価値論の問題を中心に置くこと」によって「現代の論理的価値説により再び論理学に指定された問題をさらに発展しようと試み」ているとも書かれている。(Lask, 1911=1929: S.285)

その際、ラスクが「価値説」の基盤の上になっっているとも述べつつ、ヴィンデルバントの『哲学序曲』や『否定判断論への寄与』、さらにリッケルトの『認識の対象』の重要性に言及していることから新カント学派の先達たちに配慮していることが伺える。ただし、本文中の注などでは、ラスクは、ヴィンデルバントやリッケルトの見解と自らの見解の違いについても指摘している。また、ラスクは、フッサールのことも批判しつつも高く評価して、彼に手紙を書いている。

ここで注目したいのは、以前にも拙論で何度か指摘してきたことであるが、ヴェーバーが、彼の論文「理解社会学の若干の範疇」(以下、「理解」論文と略す)の冒頭の注で、「…また、より間接的にはあるが、フッサールとラスクの著作が重要である」(Weber, 1913: S.427)と書いている点である。この注では、その他、ジンメルやリッケルト、ヤスパース、テンニース、フィーアカント、ラートブルッフ、シュタムラーなどの名前にも言及されているが、「より間接的にはあるが」という前置き付きであろうと、フッサールやラスクの名前がなぜここで挙げられているのかということが筆者の長年の疑問であった。ヴェーバーは、すでに『ロッシヤーとクニース』のなかで1903年には、フッサールの範疇的直観の概念について注で参照指示を出している。(Weber, 1903-1906=1988: S.110=224-227)

1904年の「客観性」論文、1906年の「文化科学」論文、1909年のドイツ社会学会の設立とヴェーバーのその後の脱退なども経たあとの1913年に「理解」論文は書かれ、そこでは、「歴史学」と並んで「社会学」の方法が論じられている。その際に書かれたのが、先に指摘したフッサールとラスクの名前にも言及している上記の注である。

3-2-5 「判断論」について(続き)

では、ラスクの「判断論」における「意味」、「主観性」、「価値」、「判断」間の関係とはどのようなものなのだろうか。

「判断論」の緒言は、カントのコペルニクス的功業について「理論哲学および論理学の全発展における転換点を形成する」という文言で始まる。すなわち、「理論的ものそのもの (das Theoretische als Solches)」が「対象に対して単に模写の影像的な相関者 (Korrelat)」という位置から解放され、その権力範囲が対象そのものの直中へ移入された」ことが注目されている。全論理学は、「対象的論理現象の理論」と「非対象的論理現象」の理論に分かれなければならないとされ、前者が「先験的」「認識論的」「実質的」論理学であり、後者が「形式的論理学」であるという。ラスクにおいては、こ

の前者の「対象的一論理的もの」の領域こそが、「根源的なもの」、「第一次的なもの」、「主観性によるいかなる侵害もされていないもの」、「最高義において客観的なもの」、「理論的領域における本来の究極的目標」を表現し、それに対して後者の「非対象的一論理的もの」の領域は、前者に対して隷属的な位置に立つもの、対象を略取する (Gegenstandsbemächtigung) ために主観性によって用いられる手段、略言すれば第二次的なるもの、追加的なものを表さねばならないとされている。(Lask, 1911=1929: S.287)

カントが樹立した形式的論理学においては、非対象的な「思惟の単なる形式」すなわち「悟性の形式」が占めていた位置に、「対象」あるいは「客観」が「内容」あるいは「質料」として対立させられていた (同上書: S.385=183) が、「今やこの範疇が、質料を対象性へと高めている『形式』であることが明らかになり、そこでその論理的原現象 (Urphaenomen) は、範疇的形式の中に見いだされ、論理的原構造は、カテゴリーとカテゴリー質料の分裂、これらの対象の分裂の中に見出され得る」(同上書: S.287) と述べられている。このような論述を通して、ラスクが明らかにしたかったのは、まず、新しい範疇概念の提示である。そして、範疇という概念を、範疇形式と範疇質量とに分けて、しかも、その組み合わせのところに価値や対立や意味の成立を見ようとしていた。ラスクが挑戦していたのは、①形式と質料との関係についての従来からの見解であり、②認識の対象という概念の更新であり、③判断内容と判断作用の分離と組み合わせのなかに見て取れる意味概念の確認と、④しかしそれに付着している心理学的要素の指摘、そして、⑤意味の世界に価値概念を共存させることであった。①と②は、カントやそれ以外の哲学者たちすべてへの挑戦であり、②、③、④、⑤は主にフッサールへの評価と批判となっている。ここでは、従来からの論理学の重要なテーマであった選言的判断決定の再解釈も行われている。この検討を通して、肯定・否定という主観の態度に関わる選択と、正理・非理という判断形式とその判断内容との関係を問う選択と、これらの関係の再検討を通して、ラスクは、フッサールが範疇的直観で捉えた意味の領域がまだ主観の影響下にあり、価値対立を伴っていることを明らかにした。

ところでラスクにおいては、対象という概念の純粋なかたちとして、判断の基準となる妥当性対立や価値対立からは解放されている領域が考えられている。そこに判断に関わることによって模写形象領域が生じる。(Lask, 1911=1929: S.393-394=198-199) しかし、ラスクは自ら次のように書き足している。「後者は、……主観性の基盤の上に初めて成立するものである。……『意味』という用語は、模写的判断領域の形象へと制限されることが理にかなったことであると思われる。……というものは、意味は、常に何か『の意味』(Sinn von)、すなわち、基体 (Substrat)、特に主観作用から引き剥がせる、主観性において見出し得られるもの、を意味するからである」。(同上書、S.394=199) その際、「判断」は、「非対象性のうちにその第一の位置を占める」ので、「対象的一論理的もの」と「非対象的一論理的もの」という2つの論理的なものの両領域間のまさに境界に、「対象的なものから非対象的なものへ移行する決定的な点に」あることに外ならないと述べられている。(同上書: S.290=8)

さらに、「判断」と「意味」との関係についてラスクは次のように論じている。「判断の構造の理論は、また、判断の『意味』(Sinn)の理論と名付けることができる」。(同上書：S.292)「論理的判断論は、大部分、作用から解き離しえる『意味』の構造と関わらねばならない」という洞察は、論理学的基礎概念の解明にとっては、必須のものである。「フッサールによって現代の研究に意識されるようになったこの見解こそが、この論文において主張される判断論の根底に一貫して置かれているものである」(同上書：S.292)とラスクは述べている。

3-2-6 フッサールにおける純粹論理学と形式

上述のことは、フッサールの『論理学研究』における論述と比較するとその意味が分かる。「学のこの客観的内実、学がその志向を真に充足している限り、研究者の主観性や人間性一般の諸特性からは全く独立しており、その内実はまさに客観的真理である。ところで純粹論理学が関与するのはこのイデア的側面であり、すなわち形式についてである。つまり、純粹論理学が関与するのは、特定個別科学の特殊質料や、それら個別科学の諸真理および結合諸形式のそのつどの諸特性に属するものではなく、諸真理や諸真理一般の理論的結合に関するものである。それゆえどの学問もその客観的理論的側面については、全くイデア的な性格をもつ純粹論理学的諸法則に適合していなければならない」。(Husserl, 1900=1968：I, 184-185)

「意味」の概念については、フッサールは、以下のように述べている。「したがって学において本質的に重要なものは、意味であって、意味作用ではなく、概念および命題であって、表象と判断でないとするれば、学の本質を問題とする学においては、必然的にそれ〔=意味、概念、命題〕が研究の一般的対象でなければならない。事実すべて論理的なものは、意味と対象という相関的にあい関連する範疇に含まれるのである」。(Husserl, 1901=1970：2, 105-106)

ラスクは、フッサールに手紙を書いており、その中で「特にあなたの『論理学研究』によって現代の論理学の議論へと持ち込まれた問題、すなわち、作用から意義を分離する可能性、純粹な『妥当領域』からすべての混乱している作用シンボルを引き離すことは、私の書籍においては原則として扱われているのではなく、大前提とされているのです」(ラスクからフッサール宛 1910年12月25日)と書いている。

しかしラスクは、「判断論」の第3章「対立性の発生根拠としての主観性」においては、以下のよう論じて、フッサールやボルツァーノの見地と自らの見地との違いを指摘している。「従来の論理学において一分けてもボルツァーノ及びフッサールにおいて一、存在的及び生起的ではない意味象と、実際の (real) 主観作用とに分割する企図が始められた場合には、まず意味性一般という決定的事実が問題であった。そして、レアルな基体から命題自体の意味を解き放つことを強く主張したことは、これらの論理学の歴史的意義であった。しかしながら、論理学のさらなる仕事として、この内在的に技巧化され、対立的に分割された意味、すなわち『真理自体』と『虚偽自体』の被触撃性 (Angetastetheit) も問題にせねばならない。これについて、そしてこれから帰結する原形象的無対

立的意味の概念へとさらに進み行かざるを得ないことについては、ボルツァーノやフッサールにおいては何も言われていない。(Lask, 1911=1929: S.425=255)「ボルツァーノにおける『真理自体』『虚偽自体』の『自体』、フッサールにおける『イデア的な陳述意義』の『自体』は、徹頭徹尾『擬超越性』の域にとどまっている。主観性から最大の努力をもって逃れようとしても、なおも主観性の中に強く巻き込まれている」。(同上書: S.425=255) フッサールは、イデア的な性格をもつ純粹論理的諸法則を客観的ものと見なしていたが、ラスクは、そこに主観性の関与を見ていたといえる。

3-2-7 「判断論」における妥当並びに価値の無対立性について

ラスクは、「論理性を対象の中に引き入れることは、同時にまた、妥当性及び価値性を対象中に移し入れることを可能にする」と述べ、また「判断領域は決して、妥当性及び価値性の原産地ではない」と述べている。(Lask, 1911=1929: S.388=188) ラスクは、従来、判断の結果見だされる「積極的真理」が真理性を測る基準であるかのように扱われてきたことを批判し、「積極的真理は、もはや最高の基準ではあり得ないし、もはや自己自身の規範でも、虚偽の規範でもあり得ない」と述べて、「むしろその代わりに、積極的真理及び虚偽が一樣に、最高の基準において、すなわち真理、妥当及び価値の無対立的原始形象において (am gegensatzlosen Urbild)、測定されるようになる」(同上書: S.388=188) と述べている。「真理、妥当及び価値の無対立的原始形象」という領域を想定することによって、判断、すなわち、主観性のはたらきの影響と距離をもって妥当性や価値性を語ることを可能にしたのである⁵⁾。

ラスクは、「近代の論理的価値論においてすら、一度として、価値の種々の領域が、一中略——の統一的総括概念に総合されたことはない」(同上書: S.409=227) と述べて、ヴィンデルバントやリッケルトを批判している。特にリッケルトについては、「判断論の問題を、明確にかつ組織的に、範疇の先験論理的原理と結び付けようとする試み」が彼によってなされたと述べて評価しているが、同時に、以下のように述べて批判もしている。「彼においては、無論言うまでもなく、この統一性は、……全論理学を一貫的に支配するところの、『判断論の優位』(Primat der Ueteilslehre) およびその故を以て『価値対立性の優位』(Primat der Wertgegensätzlichkeit) というシンボルのもとにある。『認識の対象』においては、範疇は、なお単純に非表象的存立 (Bestand) としておよび判断一形式として把握されている。しかしながらこれは疑いもなく判断論の前提に撞着する」と述べて批判をしている。(同上書: S.410=229)

論理学における判断について論じる際には、「選言的判断決定」が、特に対立的判断領域内部における「対立対の二重性 (Doppelheit der Gegensatzpaare)」が問題となる (同上書: S.296=18)。その対立対は、二肢選択的判断決定に見られる。(同上書: S.296=20) それらの内にはさらに、まず、「判断する態度そのものの価値対立、すなわち「あたる」(Treffen) 価値に対して、外れる (Verfehlen) あるいは「それる」(Irren) 反価値の対立、したがって、「適中性」(Zutreffendheit)

および「迷誤性」(Irrigkeit)あるいは「誤謬」(Irrtum)の対立が挙げられている。それに対して、「判断されるところのもの」の対立、したがって判断において『思惟されたもの』、『想念されたもの』、『言表されたもの』の対立が区別されている。(同上書：S.296=20) 判断から解き離しえる「意味」のこの対立は、正理と非理の対立と名付けられている⁶⁾。「判断においてはそれゆえ、自体において真または偽なる組織の真理(Wahrheit)あるいは虚偽(Wahrheitswidrigkeit)について、裁決が下されるのである。真理を真理と見なし、虚偽を虚偽と見なすことは必然的に正理(Richtigkeit)となり、虚偽を真理と見なし、真理を虚偽と見なすことは必然的に非理(Falschheit)となる。(同上書：S.300=28) つまり、「真理および虚偽は、『肯定に値するもの』および『否定に値するもの』」であり、「換言すれば、正しき肯定および否定の客観-相関者(Objektskorrelat)」なのだと言われている。(同上書：S.304=34頁)

第2章では、範疇と範疇質料を両者間に成立する関係の「項」とする見方が否定される。「範疇的『形式』はすでに『指向』(Hinweisen)を意味する表現を、質料はすでに捕らえられていること(Betroffenheit)を意味する表現を含んでいる」からである。(同上書：S.366-367) 形式および質料一般について論じられたことは、個別形式(Einzelform)や個別質料(Einzelmateriale)についても確認されている。その際、「個別形式の多様性への分裂は、徹頭徹尾質料に由来する」という見解が基礎に置かれているという。(同上書：S.368=153) そして、「意義層」(Bedeutungsschicht)とは、形式の領域に存在しており、非感性的のものであるにもかかわらず、外から由来する反映、すなわち質料が紛れ込んでいるものであると述べられている。(同上書：S.369)

第3章において、ラスクは、「対立性の生起根拠としての主観性」について論じる。ここで彼は、いかにして対象および判断決定間の技巧的中間領域、すなわち、模写形象的意味の対立的構造形象に到達できるのかという問題を検討している。(同上書：S.413) さらにラスクは、「模写形象的組織の成立に責任を負うものは、主観性に触れられるという干渉以外のものではあり得ない」とも述べている(同上書：S.414)。

ラスクは、「ボルツァーノやフッサールが、存在的でも生起的ではない意味形象と、レアルな主観作用への分割を企てた時には、意味性一般という決定的事実が重要であった。そして、一意味命題『自体』の一意味の、レアルな基体からの解放可能性を強く主張したことがこれらの論理学の歴史的意義である」と述べている。(同上書：S.425) しかし、彼は、「しかし論理学はさらに歩を進めて、この内在的に技巧化され、対立的に分裂させられた意味、すなわち、この『真理自体』および『虚偽自体』の被触撃性も問題とせねばならない」と続ける。さらに、「この『被触撃性』について、およびそれから帰結されるとこの『原始形象的無対立的意味の概念へさらに進み行かざるを得ないこと』については、ボルツァーノやフッサールには何等の叙述も見ない。……ボルツァーノにおける『真理自体』および『虚偽自体』の『自体』、フッサールにおける『観念的陳述意義』の『自体』は、徹頭徹尾『擬超越性』の域を脱しない。主観性に背を向けようというあらゆる努力をもってしても、なおも強く主観性へと巻き込まれたままである」と述べている。(同上書：S.425=255)

「正理および非理は、意味の価値性質 (Wertqualität) である。すなわち、^〴想念的 (Vorschwebend) 意味と、^〵現前する (Vorliegend) 意味、第一次的判断客体との一致、不一致である」。(同上書：S.428)

ここでは、思い浮かべられた意味に対応する客体との一致、不一致が問題となっており、ヴェーバーのユートピアとしての理念型を形成し、現実との距離を図る道具として用いるという場合と結び付けられ得るように思われる。

4. ヴェーバーにおける価値自由の意味

ここでもう一度、マックス・ヴェーバーにおける価値自由の考え方に立ち戻って、彼においては、意味と価値とはどのような関係にあったのかを検討したいと思う。

一般的に了解されているヴェーバーにおける「価値自由」の概念とは以下のようなものである。

「神々の闘争」とヴェーバーが称するように、学界でも世間でも人々は自分の信じる主義主張や価値観を尊重して譲ろうとはしない。それは、決して悪いことではなく、情熱をもって自分の主義を守り、信念を通すことは大切なことである。しかし、社会科学に携わる人間が、社会を対象として科学的な研究を行い、その研究成果の客観性を主張しようとするならばそこに問題は生じないであろうかという問いが生まれる。その問題をテーマとしているのが、「客観性」論文であった。そこでは、社会現象のいくつかの特徴に注目して選択をし、矛盾のないユートピアとしてまとめ上げること、つまり、理念型を作成することを提唱している。その理念型をモデルとして具体的事象を概念化する補助手段とするとも述べている。

「理念型」とは、「われわれの想像力にとって、十分な動機をそなえていると思われ、それゆえ『客観的に可能』で、われわれの法則的知識に照らして適合的と見える、そうした連関」のことを指す。(Weber, 1904=1998: 116) 「じっさい、それがたんなる思想の遊びにすぎないか、^〴それとも、^〵科学上有効な概念構成であるかは、^〴けっして先験的には決められない。ここでもまた、ただひとつの規準、すなわち、具体的な文化現象を、その連関、因果的被制約性、および^〴意義において認識することにたいするその効果いかにという規準があるのみである」。(同上書：117) ここでは、たとえ、ある価値理念に導かれてある文化現象に着眼しても、「客観的に可能」で、法則論的知識に照らし合わせて「適合的」と見えるかどうか判断されている。これは、想念のなかでの無矛盾的連関を客観的な対象にかけて「正理」と「非理」を問うというラスク (ヤフッサール) の視点に通じるものである。

また、ヴェーバーは、1906年に発表された「文化科学」論文では、ヴェーバーは、マイヤーの批判に対して、反駁するなかで次のように論じている。「(……いずれにせよ価値の妥当性は、経験的真理としての因果関係の妥当性に対して、何か原理的に異質のものなのである。) というのは、“価値”に志向する“諸観点”は、つまりそのもとで我々が文化諸対象を観察しこれらの対象が我々にとって一般に歴史的研究の“対象”となるような“諸観点”は、変動するものだからである。そして観点がこ

のように変動するものであるからこそ、また変動するかぎり常に新しい“事実”が、そして常に新しい仕方ですべて歴史的に“本質的”となるのである」(Weber, 1906=1965:170-171)。また、ヴェーバーは「価値討議」を重視し、人々が自分の価値観や主義主張をその討議のなかで明示したり、自覚したりするようになる手続きの必要性を主張していた。ヴェーバーは、のちのリッケルトのように哲学的な価値論の中に、その普遍性を見出そうとはせず、飽くまでも経験科学的見地に立って歴史的文化科学の「客観性」を論じようとしていたと言える。

その場合にも、重要なのは、それらの概念形成や価値討議が、「論理学」的に正当な方法で行われれば、誰にでもその意味は伝わり、共有され得るという事であった。ここでは、ヴェーバーの論理学主義の立場が見て取れる。つまり、同一律や矛盾律、因果律などの正当性は疑われてはいないのである。それゆえ、ヴェーバーの論理学は、新カント派的な「価値」概念と、新カント学派やフッサールに見られる、カントの系列を引く論理学主義とが合体するかたちで成立しており、その立場と矛盾なく重なっているのが、ラスクの見地だと言えると思われる。ヴェーバーが、どこまでラスクの範疇論に賛同していたかはより検討していく必要があるかもしれないが⁷⁾、ラスクは、従来から考えられていた認識対象の領域を模写的領域、技巧化された領域として一段格下げし、その背後に判断を待っており、まだ価値対立をしていないが判断の基準となる価値の源泉である「原対象的領域」を設定した。そのことによって、意味や価値と判断との関係が明確にされて、肯定的であることが正しい意味と結びつくという誤解から論理学を開放することを可能にした。このことによって、善いと判断することと善いという価値とは分離されえたという点は、ドイツ社会学会設立当時に「価値自由」の重要性を強く主張したヴェーバーからも評価されていたと思われる。

【注】

- 1) 1907年に「ウィーン社会学会」が、ドイツで最初に設立されたが、その「ウィーン社会学会」の発起人は、ゴルトシャイトだった。このゴルトシャイトは、のちに「社会政策学会」および「ドイツ社会学会」において、ヴェーバーの論敵のひとりとなり、ひいてはヴェーバーの「社会学会」からの退会の原因のひとつとなった人物であった。彼は、在野の社会主義の運動家で、「進化論的進歩主義」の立場に立っており、社会科学と自然科学との間に根本的な差異は存在しないと考えていた。そして、社会科学における科学的な価値判断は可能と考えていたため、社会科学における科学的な価値判断の排除の必要性を主張していたヴェーバーと対立していた。(米沢、1991:13)
- 2) 以下で使用されている翻訳書の旧仮名遣いや表記は、現代(新)仮名遣いや表記に変更して引用または参照した。また、訳語も適宜、変更してある。
- 3) この問題に関するラスクとリッケルト間のメールのやり取りの内容やヴェーバーの見解については、『社会学部紀要 第52-2号(2014年度)』56頁の注(3)に詳細を記載した。
- 4) 翻訳書を用いている場合も、原書と照らし合わせながら、適宜、訳語を変更している。(強調点は原書に対応している。)
- 5) ラスクは、「妥当概念と価値概念とを区別すること」については重きは置かれていないと述べて、『「価値性」は、『妥当』が主観性の側からくる適切な是認に関係させられている場合に、初めて『妥当』に現れ出るところの、一定の意義的色合いである』ということを示唆するに止めると書いている。(Lask, 1911=1929: S.388=189)
- 6) ラスクは、フッサールによるこの対立性への見解について、以下のように注で言及している。『「論理的賓辞

である真および偽』は、『観念的陳述意義の意味においての』『内容』に関する。「これに反して『正』は真である内容を客観に持つところの判断に帰属する」。(Logische Untersuchungen I, 1900,176 Anm., vgl.auch II, 594ff.) (Lask, 1911=1929: S.297, 21頁)

7) 1910年4月25日にヴェーバーが妻のマリアンネに書いた手紙には、ラスクが彼の論文の初めの部分を見せてくれたことが書かれており、編者が付けた注には、この論文は、ラスクの「哲学の論理学とカテゴリー論」と思われると書かれている。(M. W. G. II、Band6 S. 481)

また、「判断論」も同様に、ラスクがヴェーバーに草稿を見せていたことが1911年8月28日の書簡集の中の手紙からうかがえる。(M. W. G. II、Band7. 1Halbband. S. 270)

【引用・参考文献】

- Husserl, Edmund: Logische Untersuchungen, Erster Teil, Halle A.S. Max Niemeyer 1900=『論理学研究』1 立原・松井訳 みすず書房 1968年。
- Husserl, Edmund: Logische Untersuchungen, Zweiter Teil, Halle A.S. Max Niemeyer 1901=『論理学研究』2 立原・松井訳 みすず書房 1970年。
- Kant, Immanuel: Kritik der Urteilskraft, 1790, Cassirersche Kantausgabe, Bd.5, 1914, =『判断力批判』(上) (下) 篠田英雄訳 岩波文庫 1964年。
- Lask, Emil: ‘Gibt es einen “Primat der praktischen Vernunft ” in der Logik?’ (Kongressvortrag) 1908 Gesammelte Schriften, Hrsg. von Eugen Herrigel. J.C.B.Mohr, Tübingen 1923、Erster Band, (S.347-356)。
- Lask, Emil: ‘Der Logik der Philosophie und die Kategorienlehre’, 1911, Gesammelte Schriften, Hrsg. von Eugen Herrigel. J.C.B.Mohr, Tübingen 1923 Zweiter Band, (S.1-282) =『哲学の論理学とカテゴリー論』大橋容一郎 (監修・解説) ラスク研究会 (監修)、庄子綾その他 (訳) 上智大学哲学科紀要(40) 2014年。
- Lask, Emil: ‘Die Lehre von Urteil’, 1912, Gesammelte Schriften, Hrsg. von Eugen Herrigel. J.C.B.Mohr, Tübingen 1923 Zweiter Band, (S.283-463)=『判断論』久保虎賀寿訳 岩波書店 1929年。
- 向井守 マックス・ウェーバーの科学論——デイルタイからウェーバーへの精神的考察—— ミネルヴァ書房 1997年。
- Rickert, Heinrich: Der Gegenstand der Erkenntnis, Einführung in die transzendentalphilosophie, vierte und fünfte verbesserte Auflage, Verlag von J.C.B.Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1903, =『認識の対象』山内得立訳 岩波書店 1916年。
- 宇都宮京子:「リッケルトとヴェーバーの関係の再考察」『情況』7月号 21-38頁 情況出版 2000年。
- Weber, Max: Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre, Zweite durchgesehene und ergänzte Auflage, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, 1951所収の論文。
- (1) (S.1-145) ‘Loscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie’, (1903-06)=『ロッシャーとクニース』(一)(二) 松井秀親訳 未来社 1988年 (‘Loscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie’, (1903-06), G.A.z.W., 2. Aufl., 1951, S.1-145)。
- (2) (S.146-214) ‘Die “Objektivität” sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis’, (1904), Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd.19, J.C.B.Mohr, S.22-87=『社会科学と社会政策にかかわる認識の『客観性』』(本文中の略称:「客観性」論文) 富永祐治・立野保男訳 折原浩補訳 岩波文庫 1998年。
- (3) (S.215-290) ‘Kritische Studien auf dem Gebiet der kulturwissenschaftlichen Logik’, (1906) 『歴史は科学か』森岡弘通訳 みすず書房 1965年 99-227頁 (学問論文集を底本としたことは記されているが、第何版のものかは明示されていない)。
- (4) (S.427-474) ‘Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie’, (1913)=『理解社会学のカテゴリー』(本論文中の略称:「理解」論文) 海老原・中野訳 未来社 1990年 (‘Über einige Kategorien der verstehenden Soziologie’, Logos. Internationale Zeitschrift für Philosophie der Kultur, 4 Band, 3 Heft, J.C.B. Mohr, Tübingen 1913, S.253-293)。
- Weber, Max Max Weber Gesamtausgabe II Band6, Band7, 1Halbband, Hg.von M.Reiner Lepsius und Wolfgang J. Mommsen, in Zusammenarbeit mit Birgit Rudhard und Manfred Schön J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen 1994, 1998. (本文中では、M. W. G. IIと略す)。
- (本論文は、東洋大学井上門下記念研究助成を受けて行われた研究成果をまとめたものです。)

【Abstract】

Max Weber and Value-Freedom

Kyoko UTSUNOMIYA

Max Weber was involved in the founding of the German Sociological Society in 1909, at which time he was a strong advocate of the Society's policy of adhering to a "value freedom" attitude. Weber was seeking a way for the academy to reject anything that represented any kind of practical (ethical, religious, or aesthetic) purpose, but at the same time acknowledged that without the researcher's value philosophy, there would be neither a principle of material selection nor a meaningful recognition of individualistic realities. He was not stating that the researcher should not have a value philosophy at all.

While affirming the necessity of a value interest in choosing the material from which to begin his research, while making use of logical laws such as causality, Weber argued for the significance of constructing a selected concept, i.e., the formation of an ideological type. Rickert, of the new Kant school, argued for the logic of object selection function of the value interest and value perspective in that case; he was criticized by Emile Lusk for conflating the supposedly logical value relationship with the positive judgment of "affirming" the object.

Lusk, who was deeply influenced by Husserl's view of the phenomenological school, albeit in the vein of the neo-Kantian school, was ushering in a new view of epistemology to the traditional logic of the relationship between objects and judgments by combining the concept of value as well as the concept of meaning.

This was the downgrading of the conventionally considered domain of the object of recognition to a mimetic domain, a technologized domain, and the establishment of an "original object domain" that awaits judgment in the background. It is a source of value that is not yet part of a value conflict but is the basis for judgment. This allowed clarification of the relationship between meaning and value and judgment, freeing up the logic behind the misconception that being positive is associated with correctness. This allowed for the separation of that which is judged to be good from the value of goodness. Lusk was a close friend of Weber's, and Weber was always reading through his papers. Husserl's and Lusk's arguments also led to an update of the categorical concept, which may have supported the perspective in discussions of the "category of objective possibility." This is likely the reason that he wrote at the beginning of his "Categories of Sociology of Understanding" paper that Lusk's name, along with Husserl's name, was important, albeit indirectly.